

センサーカメラで観察された海上の森の中大型哺乳類

○井城雅夫

1 はじめに

近年、中大型哺乳類は農林業被害や人前に現れ危害を与えるなど、社会的に問題になっている。こうした被害や事件は、一部の中大型哺乳類の数が増え生息域が広がっていることも一因とされている。また、イノシシは人に馴れることにより昼間に活動し、農地や住宅地など人の活動している場所に近づいていることもその理由とされている。

近年、海上の森では歩道周辺のイノシシによる掘り返し跡が目立ち、イノシシが多く生息していることがうかがわれる。また、シカやカモシカも生息しているとされている。海上の森に設置したセンサーカメラにより撮影された画像から近年の中大型哺乳類の現状や増減、季節、時刻による変化を把握した。

2 方法

瀬戸市にある海上の森に自動撮影カメラを6か所設置した(図1)。カメラは樹幹や木杭の約100~120 cmの高さに設置し、原則1か月に1度、月の半ばに、点検及びデータの回収を行った。

撮影された動画は、同種の動物が連続して撮影された場合は30分以内に撮影された個体を同一個体として取り扱い、有効撮影回数(以下、撮影回数)を求めた。カメラ毎、動物毎に求められた撮影回数をカメラの稼働日数で割り、100をかけ、1カメラ、100日当たりの撮影回数を撮影頻度指数として求めた。

2017年1月から2022年12月の動画について、種類が判別できる中大型の哺乳類を対象に解析した。

3 結果と考察

2017年から2022年に実施した調査の結果、海上の森では、中大型哺乳類が13種確認された。イノシシが62%で最も多く、海上の森でイノシシが優占していることが考えられる(図2)。ハクビシン、カモシカ、タヌキ、シカが7%から10%であった。

2018年から2022年にかけてイノシシの撮影頻度指数は豚熱の影響とみられる極短期的な減少はあったが、概ね横ばいであった(図3)。2017年から2022年にかけてシカの撮影頻度指数が増加していた(図4)。カメラの映像からシカのメスの個体数が増加しているとみられ、今後さらに個体数が増加するおそれがあることが考えられた。また、カモシカ、ハクビシンの減少がみられ、アライグマの増減がないように考えられた(図4)。

イノシシやカモシカ、シカ、タヌキは季節により撮影頻度指数に変化があった。子育ての期間や繁殖期、冬の餌が少なくなる時期など季節により活動パターンや行動範囲を変えていると考えられた(図5)。イノシシやカモシカ、シカ、タヌキは主に夜間に活動していると考えられたが、カモシカやシカは昼間にも活動していることが考えられた(図6)。

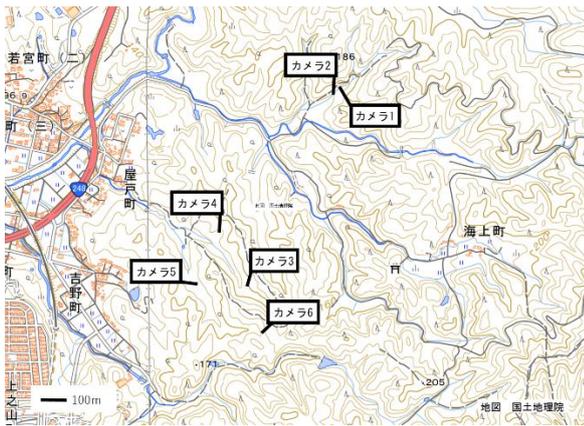


図1 カメラ設置位置

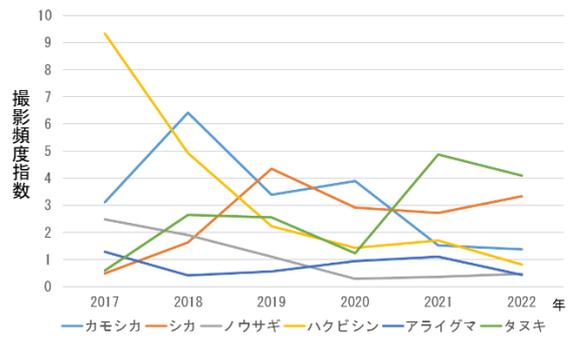


図4 イノシシ以外の中大型哺乳類の撮影頻度指数の経年変化

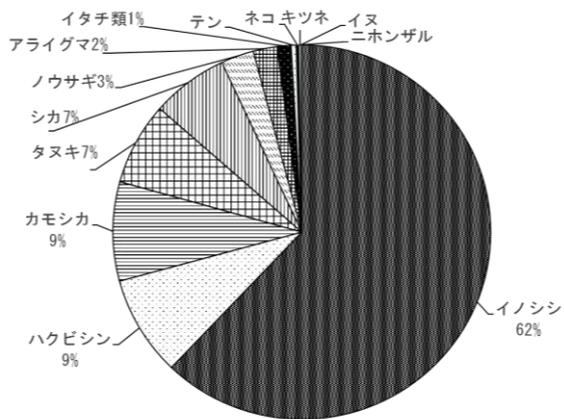


図2 2017年から2022年までの撮影回数の割合

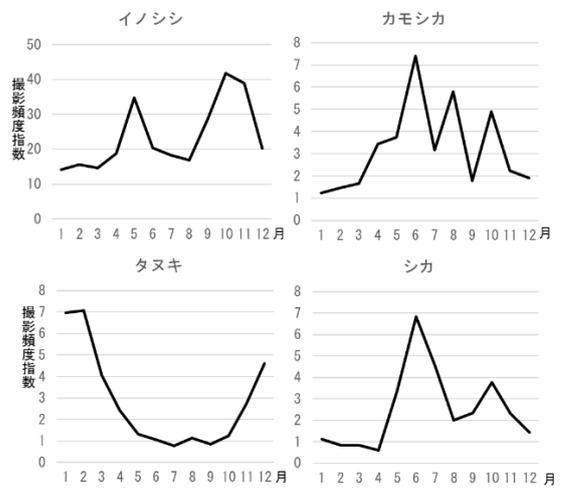


図5 月毎の撮影頻度指数

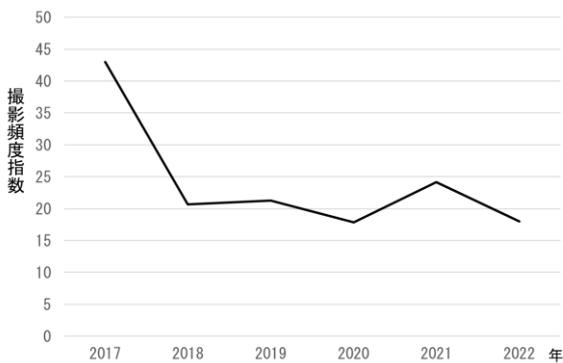


図3 イノシシの撮影頻度指数の経年変化

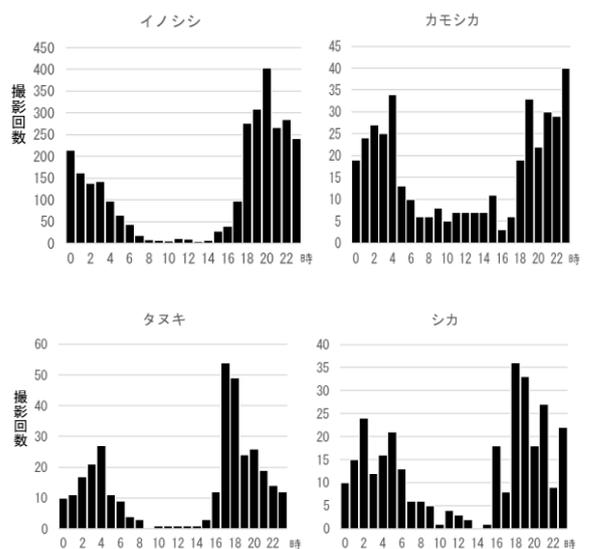


図6 時刻ごとの撮影回数